

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

兆民と龍馬

現代龍馬学会 会長
片岡 雅文



2人の出会い

いそいそと煙草屋へ走つて
るのが愉しい。

「尊王討幕と民権拡張」



中江兆民

例えれば、明治24年（1891）の『立憲自由新聞』に、兆民は「尊王討幕と民権拡張」と題する一文を寄せた。そのなかで、自由民権運動を幕末の尊王討幕運動になぞらえてい

る。坂本龍馬は弘化4年（1847）の生ま
れだから、天保6年（1835）生まれの
坂本龍馬より12歳年下だった。兆民にと
て龍馬はずいぶん大人に見えただろう。
二人が出会ったのは長崎で、慶応2年
(1866)ごろのことといわれる。

そのときの思い出を、兆民は後年、弟
子の幸徳秋水に語った。秋水の『兆民
先生』につづられた次の二節は、よく知
られている。

「先生會て坂本君の状を述べて曰
く、豪傑は自ら人をして崇拜の念を生
ぜしむ、予は當時少年なりしも、彼を
見て何となくエラキ人なりと信せるが
故に、平生人に屈せざるの予も、彼が
純然たる士佐訛りの言語もて、『中江
のニイさん煙艸を買ふて来てオーセ、』
など、命ぜらるれば、快然として使ひ
せしこと屢々なりき」

そのころ、兆民は数え年で20歳、龍
馬は32歳。あの奔放不羈の兆民が龍馬
から「中江のニイさん」と声をかけられ、

長崎でのこの挿話は、幸
徳秋水によって記録された
ものだが、兆民自身も龍馬
について何度も書いてい
る。

例えれば、明治24年（1891）の『立憲自由新聞』に、兆民は「尊王討幕と民権拡張」と題する一文を寄せた。そのなかで、自由民権運動を幕末の尊王討幕運動になぞらえてい

る。

「坂本龍馬は弘化4年（1847）の生ま
れだから、天保6年（1835）生まれの
坂本龍馬より12歳年下だった。兆民にと
て龍馬はずいぶん大人に見えただろう。
二人が出会ったのは長崎で、慶応2年
(1866)ごろのことといわれる。

そのときの思い出を、兆民は後年、弟
子の幸徳秋水に語った。秋水の『兆民
先生』につづられた次の二節は、よく知
られている。

「坂本龍馬。彼は、おれを
殺しに来た奴だが、なかなか人
物さ。その時おれは笑つて受け
たが、沈着（オチツ）いてな、
なんとなく冒しがたい威權があ
つて、よい男だつたよ」

伏水はたぶん伏見で、鳥羽伏
見の戦いを言ったのだろう。諸
國の有志が天下を動か
そうとするのは尊王討
幕運動も自由民権運動
も同じであり、龍馬の
薩長連合のように、民
権運動も諸勢力が合同
連携して政府に立ち向
かっていかねばならな
いと、兆民は論じてい
る。

伏水はたぶん伏見で、鳥羽伏
見の戦いを言ったのだろう。諸
國の有志が天下を動か
そうとするのは尊王討
幕運動も自由民権運動
も同じであり、龍馬の
薩長連合のように、民
権運動も諸勢力が合同
連携して政府に立ち向
かっていかねばならな
いと、兆民は論じてい
る。

おれを殺しに来た奴



坂本龍馬

「近代非凡人卅一人」の
一人として

は述べている。

そして、もう一つ注目
したいのは、最晩年の著
述『一年有半』で、兆民
が「近代非凡人卅一人」
の一人として、龍馬を挙
げていることだ。

31人は、桃川如燕、陣幕久
五郎、三遊亭円朝、竹本越路
太夫ら、講釈師、相撲取り、
落語家、淨瑠璃語りなども多
く、いかにも兆民らしい顔ぶ
れである。幕末・明治の傑物
では、藤田東湖、坂本龍馬、
大久保利通、勝海舟、西郷隆盛、
岩崎弥太郎、福沢諭吉らが挙
げられ、伊藤博文、山県有朋、
板垣退助、大隈重信らは除外
されている。

これを見ると、古來の価値
観にとらわれず、誰も足を踏
み入れたことのない険しい道
を敢然と歩いていった志操あ
る人物を、兆民は選んでいる
ように思える。

龍馬が「おれを殺しに来た
奴」だったというのは、海舟の
言い分をそのまま信じるわけには
いかないだろう。ただ、海舟
はこの挿話を人によく語つたよ
うで、兆民も聞かされたらしい。
明治の人士も、龍馬のようにな
外へ向けて目をひらき、大いに
羽ばたいていくべきだと、兆民
は述べている。

引用は『中江兆民全集』（岩
波書店）、『坂本龍馬全集』（光
風社書店）、兆民と龍馬の画
像は国立国会図書館デジタル
ライブラリーから。

「ぼれ話」一 犬歩棒當記（一十四）

犬歩棒當記（二十四）

「不愉快な歴史」

宮川 祯一

う悪口である。
知らないお前
が悪いという
前ふりだ。政
治家が歴史を
持ち出す際は
だいたいこん



中国マカオの書店の入り口に「恭賀新禧」とともに掲げられた赤地に金文字の「龍馬精神」(吉祥句。坂本龍馬とは無関係)

歴史の方もまた難しい問題を抱えている。「歴史的に

に向き合うことだ。しかし
容易なことではない。

テン師の口上だ。「このサブリメントを飲んだお客様の九十二パーセントに健康効果がありました(当社調べ)」を私たちがまじめに受け取りがちなのは「科学的」という言葉に騙されているのを客観視するのは難しいも本当であつて欲しいことが勝ち気味だ。人間らしい心の動きである。歴中ここにある。他人の悪口を言うことは簡単だが、自分も本当に勝ち気味だ。

「歴史認識」という言葉を最近よく聞く。この場合の歴史は政治的な意味であつて、私たちが龍馬を語る際のような歴史ではない。本物の歴史研究者は「歴史的に」とは口に出して言わない。しかし思考はいつも歴史的であるはずだ。本物の科学者もまた普段から科学的であつて「科学的に」などとは言わない。「科学的に見てですね」などという言葉は「これから数字を使つて皆様を騙しますので引つかつて下さい」という。

な意味である。一方、学問としての歴史にも民族・國家・地域・宗教・社会的な価値観が必ず反映されていられる。また個人の生まれた環境や自らの嗜好・自尊心や他者への差別意識から逃れることは難しい。

そもそも客観的な歴史などは存在しない。坂本龍馬を取り上げようが経済指數を比較しようが主観的なものである。龍馬を取り上げる段階ですでに主観であり経済指數を選んだ段階で主観である。本当にこのことは

コラム・龍馬のこと

イラスト展「時代を駆ける龍馬」展を終えて

楠本 剛

坂本龍馬記念館での作品展示も5回目を迎え、昨年は「坂本龍馬生誕180周年」ということで、変化球的な龍馬の歴史を追ってみようと『後世の人々が作った様々な坂本龍馬たち』をテーマにしました。

彼に想いを馳せた人々、そして数々の作品もまた、「坂本龍馬の歴史を継ぐものである」と言えるでしょう。

龍馬さんが亡くなった後、明治から平成に至るまで、小説、映画、ドラマ、そして銅像など、様々な龍馬さんが、それぞれの時代が求めるイメージを背負って登場しました。その中で、各時代ならではの龍馬像を打ちたてたのはこれだ、というものを自分なりに選んでみました。

皆さんそれぞれに、思い入れのある龍馬を演じた役者さんや、龍馬さんを好きになったきっかけとなった作品があると思います。小説『竜馬がゆく』が新聞に連載された頃に生まれた自分にとって、リアルタイムで見てないものもありますが、そこはイメージ、カッコよさ重視で描きたいものを選びました。実際描いてみて、展示してみると、「ああ、あの映画の、あのドラマの龍馬も並べたかったな」と、相変わらず自分の力不足を感じます。



最後に、今回の展示で一番多く反応をいただいたのは、おまけで展示した18年前に描いた絵手紙系イラスト（記念館でのイラスト募集のデビュー作）でした。嬉しい反面、（えっ？それがええの？）という意外な気持ちもありいの…。絵手紙は当時散々描いて、すっかり飽きてしまっていたのですが（汗）。今年の展示ではてんこ盛りに絵手紙を描こうかな…。

“話してみるかよ”

「温かい言葉」

教員OB 宮 英司

森健志郎館長が急逝された。本当に驚いたし、残念でならない。10月16日にお電話をいただいた。てっきり「レッツゴーハンド・イン・ハンド」の参加者の集まり具合を心配されてのことかと思ひきや、私が提出した（現代龍馬学会研究紀要）「坂本龍馬は教科書においてどのようにとりあげられてきたか」の原稿のことであった。

「あんなことがあるもんやねえ。まっこと龍馬は教科書に記述される42人の人物の中には、残念ながら入れてもらえんかったけんど、その平成元年の教科書から逆に龍馬の記述が増えてきたとはねえ。おまんの言う通り他の幕末の人物を7人も8人も書いたら龍馬のことも書かざるを得んわの。いやあ、けんど感激したよ。発表を聞いて、原稿を読んだき、よけわかった。できたら、あの原稿を増刷したいけんど…。龍馬のことが教科書に十分に載ってないことは、みんなあ知っちゅうけんど、そのことによって学習指導要領で規定された時から、教科書の執筆者に逆バネが働いたという分析は初めて聴いた。いや、よかったです。また、話そうや。」と一気に話された。

唐突にお褒めをいただいたので、ありきたりな返事を返すのみであった。ただ、日頃の歯に衣着せぬ館長の物言いからすれば最大の誉め言葉であったと思っている。

現代龍馬学会の設立やシェイクハンド龍馬像の建立、ハンド・イン・ハンドの企画、新館のホール構想の立案等々、次々と龍馬をメインに据えた企画を打ち出され、成功させてきた森館長。本当に疲れ様でした。

あの日の温かい言葉が耳元から離れません。「やっぱり龍馬がきちんと教科書で取り上げられるようになるまで頑張らんといかんのよ。」

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp